

「琉球処分」関連年表

年	月日	事項
1871(明治4)	7月14日 11月6日	日本全国の廃藩置県(琉球国は鹿児島県の管轄) *琉球国・宮古の貢納船が台湾に漂着。その後、琉球人54人が殺害される(8日)。 12人は翌72年6月に福州経由で帰国
1872(明治5)	7月27日 8月19日 9月14日	琉球国の維新慶賀使節(伊江王子ら)鹿児島着 琉球の事務を外務省が担当 琉球国の維新慶賀使・伊江王子に対し、天皇が「尚泰を琉球藩王へ封じる詔書」 天皇による琉球の「冊封」
(以前は旧暦)	9月27日	琉球国が「各国と取結候条約並今後ノ交際」は外務省へ移管命令
1874(明治7)	4月 7月12日	明治日本、台湾へ出兵 琉球の管轄を外務省から内務省へ 最後となる進貢使の国頭親雲上ら渡清
1875(明治8)	3月15日 5月8日 6月12日	進貢使の国頭親雲上ら琉球人18人が北京に現れる。紫禁城内の四訳館逗留 内務卿の大久保利通、琉球の池城、与那原、幸地、津波古に琉球への鎮台分営設置などを命令 琉清関係断絶命令(5月29日) 松田道之を琉球へ派遣(第1回) *琉清関係断絶命令などを首里城で伝える
1876(明治9)	5月17日 12月10日	明治政府が琉球の警察権・司法権の移管命令 幸地朝常、蔡大鼎、林世功ら39人が王命を受けて渡清
1877(明治10)	1月10日 2月	幸地朝常らの渡清発覚 三司官の与那原良傑が神戸港停泊中の清国公使何如璋らが乗った「海安丸」に忍び込み、琉球救援を求める尚泰王の密書を手渡す。(7~11日ごろ)
1878(明治11)	冬	琉球が各国領事館などへ密書
1879(明治12)	1月8日 3月12日 3月25日 3月25日 3月26日 3月27日 3月28日 3月29日 3月30日 3月31日 4月4日 4月27日 5月27日 6月13日 6月23日 6月25日 10月7日	松田道之を琉球へ派遣(2回目) 松田道之を処分官として琉球へ派遣(3回目) 松田道之琉球着 那覇港着し上陸(午前10時) 内務省属官出張所在勤の者30人余に沖縄県御用掛の兼勤を命じる。 尚泰に27日午前10時に首里城に参城することを通告 首里那覇久米泊の各士族の代表に27日午後集合するよう通告 松田道之が随員を率いて首里城入城(午前10時) 31日までに首里城を明け渡すことべきことを通告する。各所を封印し、城門を閉鎖し巡査を立て 松田が首里那覇久米泊の各士族代表に廃藩置県を通告する。 内務省出張所に「処分官出張所」および「沖縄県仮庁」を開き標札を掲げる。 琉球藩を廃し沖縄県を設置し、首里に県庁を置くこと、但し当分は西村の内務省出張所仮庁を置く 地方に関する役人及び間切役人は旧職名で現在の職務を命じた。 県官3人ずつを一組として、一組5間切を担当して35間切へ派遣 諸間切の要港に巡査を派遣し、清国への渡航を取り締る。 尚泰王ら首里城を退去 久米島、慶良間島などへ巡査を派遣し清国への渡航を取り締る。 首里城引渡し 沖縄県設置を全国へ布告 世子・中城王子が出發(午前9時) 尚泰王が那覇を出港(6月9日東京着) 松田道之が随員の一部を伴って離那覇 松田ら横浜着(鹿児島、神戸経由) 松田が天皇臨席のもと政府に報告。 天皇から尚泰(最後の国王)へ「金禄公債書(20万円)を下賜のお達し

明治政府が琉球國の主權を奪奪し、沖縄県を設置した「琉球処分」から、今年（140年）を迎えた。明治日本は抵抗する琉球人を力で抑え込み、のみ込んだ。それから140年がたつ。かの沖縄では米軍普大間飛行場（同県宮野満市）の名護市辺野古移設に反対する民意が公然と無視され続けている。「沖縄は、今も主權が奪われ続けている」「沖辛大の後田多敷准教授は指摘する。現状は「琉球処分」と陸續なのだという。

（柏尾 安希子）

「琉球処分」とは何か。

「1879年に明治政府が沖縄県を設置するにあたり、それ以前にあった琉球国を日本に取り込んでいく過程のことをいう。『琉球処分』とは明治政府の言葉であり、プロジェクト名だ」

「日本と琉球国はそういう関係になったのか。」

「1609年、豊津（薩摩藩）が琉球国を侵略し、実効支配に置いた。その後、明治政府が王政復古で始まり、版籍奉還が行われた。土地と人民を（朝廷に）返したのだが、もともと琉球は天皇のものではなかったため薩摩は琉球を返還しなかった。このため明治政府は1872年、新政府を祝う維新慶賀の名目で琉球の使節を東京に呼び、送り込まれた使節団に琉球国王尚泰を「琉球藩王」にするという任命書を送した。国王のおじなどで構成された使節団は外交権限がなく断つたが、結局押し切られてしまった。そのときに初めて明治政府と琉球の関係ができた。すなわち天皇と琉球国王が君臣関係となったのだ」

沖縄県を設置した過程は。

時代の正体

沖縄考



「琉球藩王」に命じた書牒は、

「館団を事実上、軟禁状態に置き、狡猾して押しつけた關係に對して、明治政府は『冊封』と表現した。世界が兎っていたため、なんらかの形は作らなければならなかった」といふとだ。その後、苗里城接収のために軍隊を送る際にも、東京でなく九州からひそかに送ったくらいだ。

「君臣關係は名目であり、取り込むためのプロセスだった。『琉球処分』に対しては『あゝまいだだ』という認識だったと認定した」という認識も存在するが、王權があつた國家に對して条約も結ばず『処分』したことは、つまり一國をつぶしたということ。だが、たとえばアイヌ民族が『日本人だから北海道は日本のものとされ、長い間先住民と認めなかつたような論理が、琉球人についてもとられている。そういう見方も含め、日本のゆがんだ近代、現代がある」

薩摩との關係があつたから、琉球は天皇の臣下とされたのか。

「薩摩の实效支配を受けていたため、段階で琉球は日本のものになつていった」という理屈があるが違ふ。

明治政府は、琉球は「日(薩摩)清(清國)」と言つたが、清との開封關係は合意した。清國は遠い小国である琉球におおらかに接し、交易を許し、琉球から使節を歓迎するなど、琉球国にはメリットがなかつた。一方、軍事的に侵襲した薩摩は琉球を屬国とし、収奪し続けた。そして、それはあくまでも島津との關係であつて天皇とは關係ない。その点は明治政府も分かつていたため、強引に君臣關係をつくつたのだ。

「琉球処分」の狙ひは、「明治政府による台湾出兵(74年)や、朝鮮と国交をめぐつて衝突した江華島事件(75年)とほぼ同時並行で行われた。清の開封体制の序列1位だった朝鮮と2位だった琉球を切れば清は裸になるだろうと、そうする意味があった。それはやがて日清戦争につながる。征韓派が敗れた明治6(74)年の政変後、早い段階から日本は侵略国家に軸足を移しつつあったのだと思う。『琉球処分』については明らかに主權の簞簞であり、侵略といつていい」

であり、日本にとって声を聞く必要がないのだ。沖縄県民は同じ国民でないか、ランクが低い国民と云うことだ。琉球は、主権が奪われている状態が今も続いているといえる。そして日本は、そのことについて気付かせないようにしている」

主権が奪われ続けているとは――主権が奪われ続けているとは（衝撃だ）。

『琉球処分』の意味は、琉球に決定権がないということ。それを奪ったということだ。だから県民投票をしても認められることはない。以降、沖縄の意思が通ったことはない。通ったとすれば、それは沖縄の意思ではなく、日本に意味があったからだ。歴史資料を見ると、琉球の人は昔から正論を語り、日本政府を説得しようとしてきた。だが、そういうものではないのだ。政府は沖縄の意を理解していないのではなく、言っていることが正しくてもやるのだから。そうした資料を見ると、国が滅ぶことは悲しいことだと思ふ」

沖縄県民の意思が通る日は来

しいた。あつし 沖縄県・石垣島出身。専門は琉球史、日本近代史。著書は「琉球救国運動—抗日の思想と行動」（出版舎Mugen、2010年）、「救国と真世—琉球・沖縄・海邦の史志」（琉球館、19年）など。

「琉球国を版図に編入したのは、東アジアの關係を考える際にそこを確保することに意味があった、といふことだろう。琉球周辺の海は資源の通り道であり、琉球は本気で船を通さない対応をすれば、王上がつてしまふ。日本はそうした場所をとる意味を自覺していた。日本が国として成り立つために必要だったと考えたのだ」

—それから140年が経過した。

「台湾や香港など、日本が奪つてきた土地は返還されてきたが、まだ返されてないのが琉球だ。沖縄は唯一の地上戦の舞台となり、現在、宮古島など、南西諸島への自衛隊配備が進行されようとしている。たとえば辺野古の問題も、県民投票までして反対の声を上げても通らない。主権を奪つた場所

ると思ふか。「たとえは辺野古への移設が止まるとしても、それは日本にとつて意味がないからではないだろう。主権が回復しない限り、憲章は通らない」と思う。それは日本の中にいるのであれば、きちんとした国民として認められるということだが、多分、そういう日は来ないだろう。日本にもつと努力があったときはよかったかもしれないが、日本自体が衰退して隣国化が始まつてゐる。だから難しいのではないかと思つてゐる」

「現状を許しているのは主権者である日本国民。熱く語ればそういうことになる。ただ、日本政府の政策の動かし方をみると、沖縄の主権が失われていることが分かつていながら、国民にそれを気付かせないようにしている」

視点

沖縄から

神奈川大准教授・後田多敦さん



「亡命」という単語から、どんな人物や出来事を思い浮かべるだろうか。そして、それは身近な問題だろうか。近代沖縄からは、百人を優に超える亡命者が出ている。一般的に、亡命は政治的な事情などにより政治家や学者などが他国に逃れることとされる。

近代沖縄では一八七九(明治十二)年の「琉球処分」が契機で、主な亡命先は清国だった。今年はそれから百四十

年である。

現在の沖縄県域はかつて琉球国だった。明治日本は琉球国の王権を簒奪して編入、沖縄県を設置した。明治政府は、その事業を琉球処分と名づけている。この「処分」に抗う琉球人の活動が、国内外で展開された。処分された琉球を脱出した

「琉球処分」から140年

「遠い記憶」ではない

人々は、清国の福州や天津、北京などで、日本の暴虐を訴え琉球復興への支援を求めた。琉球史ではそれを「琉球

の公的関係は、明を建国した朱元璋の求めで一三二二年に始まり、およそ五百年間に及んだ。冊封関係は、琉球国に

人々で、富川は最後の一人だった。処分後、富川は一時期戸籍問題を務めるが、一八八二年に仲間を伴って亡命。現地

の琉球人と合流し、救国運動に取り組み九〇年に清国で没している。

この時期、朝鮮半島では壬午軍乱(一八八二年七月)が起きて、日本公使館が襲撃されたこともあり、富川の亡命は明治政府に衝撃を与えたようだ。在京の新聞でも話題になっていた。沖縄からの亡命者はその後も続き、その全貌はいまだ明確ではない。

沖縄そのものが処分された結果であり、遠い記憶ではないのだ。そして、百四十年を経た今でも、処分される側とする側の構図は、それほど変わっていない。

救国運動」と呼ぶ。東アジアにおける「抗日」運動の先駆けである。なぜ抵抗運動の一つの形が亡命だったのか。簡単にいえば、東アジアの伝統的国際秩序だった冊封関係における琉球国の歴史的蓄積だ。中国と

かつて国際主体としての証しの一つだった。そして、その中で琉球人の拠点やネットワークが蓄積されていた。琉球処分の際、旧琉球国中

枢からも多数の亡命者が出た。その一人が旧三司官の富川盛重(中国名・毛鳳来)である。三司官は琉球国の国政を担う官員の最高職位(三

琉球人が縁故を遡ると、その多くは処分や抗いの記憶にたどりつく。亡命者資料を繰ると、私自身も生まれ育った沖縄の地名やゆかりの人名に出合うことも少なくない。

日々論々

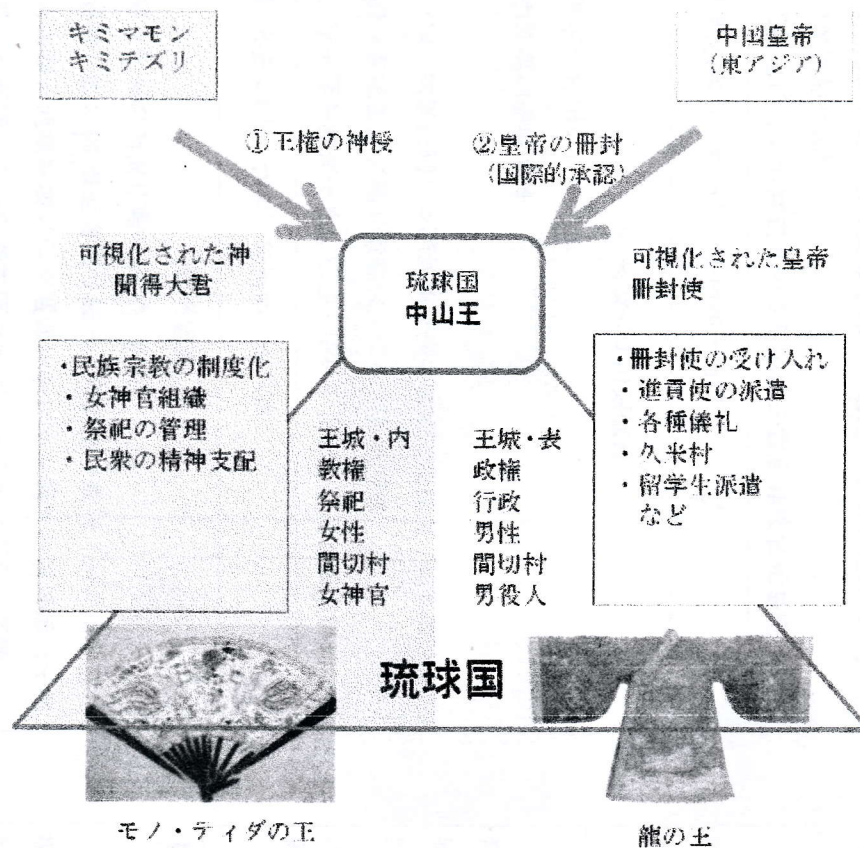
「琉球処分」 140 年

—明治政府はどのように琉球国を併合したか—

後田多敦 (神奈川大学)

記憶の継承を進める神奈川の会
2019年6月25日 (18:30~20:30)
於：かながわ県民センター

■資料① 琉球国の王権の正当性を担保する 2つの仕組み



●冊封 (さっぽう、さつぷう、さくほう)

中国皇帝が使者を派遣して琉球国王を任命することをいう。もともとは皇后・親王世子・諸侯(郡王・郡主・県主)などを定め立てる中国国内の君臣関係の秩序をさしたが、周辺諸国の王を任命することも含めていうようになった。

中国皇帝を頂点とした、貴族や官僚との間に形成された国内的な君臣関係の秩序が周辺諸国の王にまでおよびアジア的(当時でいえば国際的)な君臣関係の秩序に発展したものとされる。この国際関係を総称して冊封体制という。冊封体制は古代からあるが、明代(1368年建国)以降に顕著になる。明の太祖洪武帝は即位まもなく周辺諸国に使者を派遣して入貢(進貢・朝貢ともいう、貢物を納めること)を促した。これに応じて入貢した国は朝鮮・日本・琉球・爪哇(インドネシア)・暹羅(タイ)・三仏齊(インドネシア)・蘇門答刺(インドネシア)・満刺加(マレーシア)・安南(ベトナム)など十力国余にのぼった。これらの国を朝貢国・進貢国という。

進貢国の王侯が代わると、中国皇帝は使者を派遣して新王を任命する。これを冊封(「さくほう」ともいう)といい、その使者を冊封使という。

中国と周辺諸国との進貢・冊封の関係は、中華思想に基づくものといわれ、周辺諸国の王侯を儀礼的に任命して臣下にする政治的側面と進貢品を高価で買取り、しかも領内での貿易を許可するという経済的側面があった。進貢国側が進貢貿易・朝貢貿易と称する理由はここにある。

(『冊封使—中国皇帝の使者—』沖縄県立博物館友の会、1989年)

●聞得大君(きこえおおきみ、ちふいじん)

琉球国で女神官組織の頂点にいた最高神官(女性)。「きこえおおきみ(ぎみ)」。琉球語で「ちふいじん」という。琉球国第二尚王統(15世紀から19世紀末)では、王権の正当性を担保する仕組みとして国家祭祀制度を整備し、祭祀を司る全国の女神官を組織化して国家統治システムにとりこんだ。聞得大君は全国に配置された女神官のトップとして、国家祭祀をとりしきった。

同時代資料で確認できる聞得大君は、1501年に建立された「玉御殿の碑文」に刻まれた「きこゑ大きみのあしおとちとのもいかね」が初出となる。「おとちとのもいかね」は第2尚王統の初代・尚円の娘で、3代目国王尚真の妹。

聞得大君の屋敷は当初、首里城内にあったとされるが、何度か移転していて琉球国末期の屋敷は現在の首里中学校の敷地にあった。島津氏が1609年に琉球国を侵略した際には、聞得大君の屋敷を焼き討ちした。屋敷はその後再建された。

聞得大君は、琉球国滅亡後の1887(明治17)年まで公的に維持された。公的な最後の聞得大君は大宜見ウシ。明治政府によって廃止された後も、その任務は尚安子(最後の国王・尚泰の娘)、そして今帰仁延子(尚泰の長男・尚典の娘)と、沖縄戦直前まで引き継がれた。

■資料②_歴代聞得大君(確認できるもの)

初代:月清(名前の初出、1501年)

2代:梅南

*「おもろさうし」1巻編纂(1531年)

3代:梅岳

4代:月嶺

*島津侵略(1609年)

*「おもろさうし」2巻編纂(1613年)

*「おもろさうし」3巻以降編纂(1613年)

5代:円心

6代:月心

7代:義雲

8代:坤宏

9代:仁室

10代:寛室

11代:順成

12代:徳沢

13代:法雲

14代:仙徳

15代:仲井間翁主

16代:安里翁主(大宜見うし)

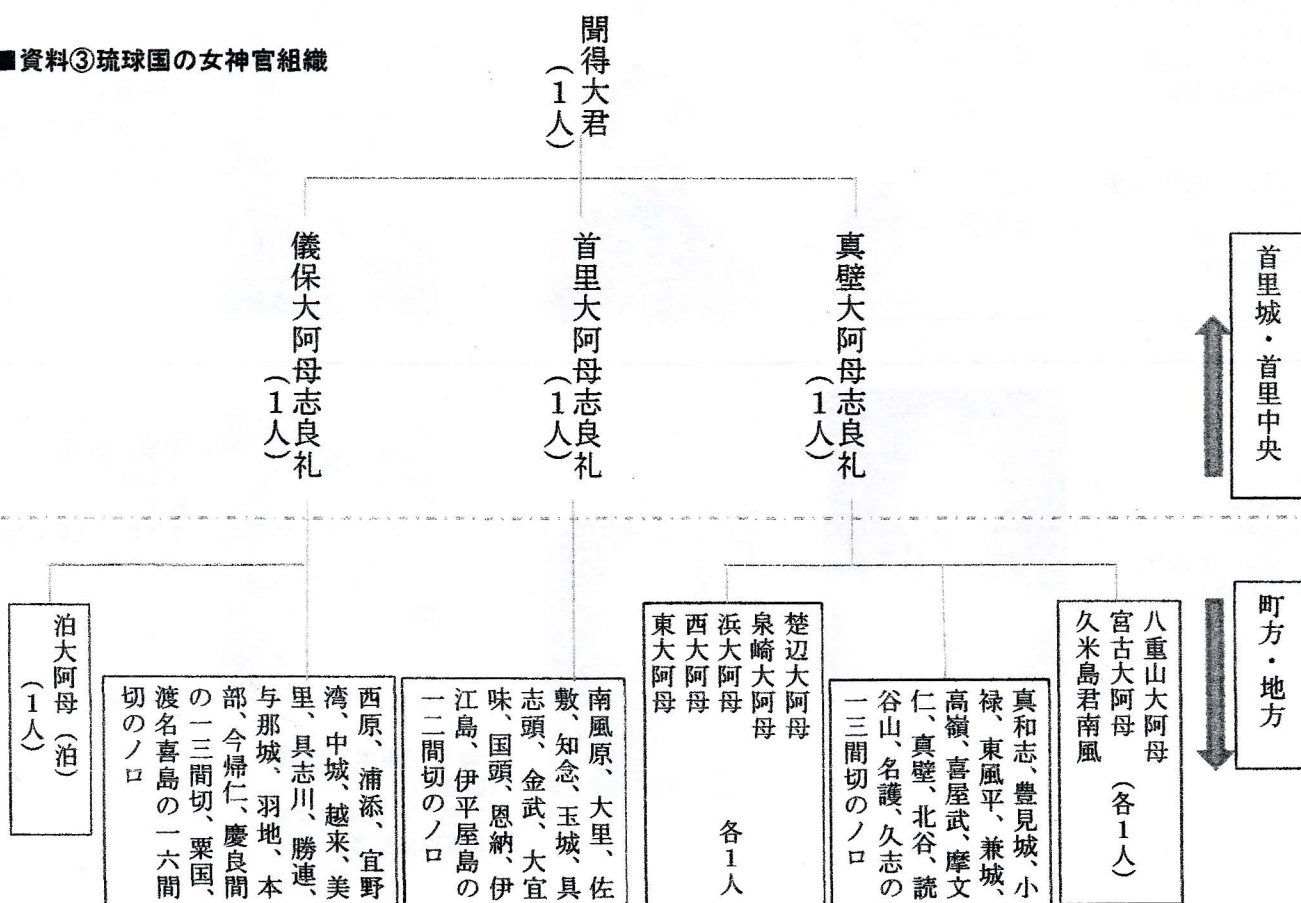
*琉球国滅亡(1879年)

17代:尚安子(尚泰娘)

18代:今帰仁延子(尚典娘)

*沖縄戦(1945年)

■資料③琉球国の女神官組織



■資料④_琉球国末期の主な王府幹部



国王・尚泰
1879年東京連行



摂政・伊江王子朝直（尚健）
1872年維新慶賀使
尚育王（前王）の弟

三司官・宜湾朝保（向有恒）
1872年維新慶賀副使
在任：1862年から75年

三司官・亀川盛武（毛允良）
在任：？～1872年
初期の抗日派の中心人物
警察で尋問



三司官・池城安規（毛有斐）
在任：1874年から77年
1877年、東京で悶死

㊤三司官 浦添朝昭（向居謙）
在任：1872から79年
1879年逮捕／勾留
県顧問



三司官 与那原良傑（馬兼才）
初代駐在東京使者
（1873年）
在任：1877年から79年

㊦三司官 富川盛奎（毛鳳来）
在任：1875～79
1879年県顧問
1882年亡命



幸地朝常（向徳宏）
鎖之側から物奉行。
1876年に渡清



津波古政正（東国興）
官生
2代目駐在東京使者
（1874年）

伊舎堂（親里）盛英（翁逢源）
鎖之側、首里城明け渡し
の琉球側担当

【資料⑤】明治五（一八七二）年九月十四日、

琉球藩王冊立の詔（明治五年九月十四）

朕上天ノ景命ニ膺リ万世一系ノ帝祚ヲ紹キ奄ニ四海ヲ有チ八荒ニ君臨ス今琉球近ク南服ニ在リ氣類相同ク言文殊ナル無ク薩摩ノ附庸タリ而シテ爾爾尚泰能ク勤誠ヲ致ス宜ク顯爵ヲ予フヘシ陸シテ琉球藩王ト為シ叙シテ華族ニ列ス咨爾尚泰其レ藩屏ノ任ヲ重シ衆庶ノ上ニ立チ切ニ朕力意ヲ体シテ永ク皇室ニ輔タレ欽ヨ哉

御名御璽

【資料⑥】明治八（一八七五）年五月二十九日

其藩ノ儀、從來隔年朝貢ト唱ヘ清國へ使節ヲ派遣シ、或ハ清帝即位ノ節慶賀使差遣シ候例規有之趣ニ候得共、自今被差止候事、藩王代替ノ節、従前清國ヨリ冊封受ケ来リ候趣ニ候得共、自今被差止候事
右ノ通可心得此旨相達候事

明治八年五月二十九日

太政大臣三條実美

【資料⑦】明治九（一八七六）年五月十七日

其藩治之内裁判之儀自今其地ニ在ル内務省出張所ニ被附右規則左之通被定候條此旨可相心得事

一 藩内人民相互ノ間ニ起ル刑事ハ藩庁ノ鞫訊シ内務省出張所ノ裁判ヲ求ムヘシ

一 藩内人民相互ニ起ル民事及ヒ藩内人民ト他ノ府県人民（兵員ト普通人民トヲ論セス）トノ間ニ相関スル刑事民事ハ直チニ内務省出張所ニ訴ヘシムヘシ

明治九年五月十七日

【資料⑧】明治十二（一八七九）年三月十一日

琉球藩尚泰

去ル明治八年五月廿九日并ニ同九年五月十七日ヲ以テ御達ノ條件有之処、使命ヲ不恭実ニ難差置次第二立至リ依テ廢藩置県被仰出候條此旨相達候事

明治十二年三月十一日

【資料⑨】明治九（一八七六）年五月十七日

琉球藩ヲ廢スルノ勅諭

琉球藩旧シク王化ニ服シ寔ニ覆育ノ徳ニ頼ル今乃チ恩ヲ怙ミ嫌ヲ挟ミ使命ヲ恭マス是蓋シ舟路遠遠見聞限アルノ致ス所朕一視同仁深ク既往ノ罪ヲ譴メズ該藩ヲ廢シ尚泰ヲ東京府下ニ移シ賜フニ第宅ヲ以シ且尚健尚弼ヲ以テ特ニ華族ニ列シ俱ニ東京府ノ貴屬タラシムベシ所司奉行セヨ

御名御璽

【資料⑩】（一八七九年、『琉球処分』下巻百五十頁）

琉球藩

其藩ヲ廢シ更ニ沖繩県ヲ被置候條此旨相達候事
但シ県庁ハ首里ニ被置候事

明治十二年三月十一日 太政大臣三條実美

【資料⑪】（一八七九年、『琉球処分』下巻百五十頁）

琉球藩

今般其藩被廢候ニ付テハ右為処分内務大書記官松田道之出張仰付候ニ付諸事同人ノ指揮ニ拠テ可取計此旨相達候事

明治十二年三月十一日 太政大臣三條実美

史料は句読点やルビを付したり、改行したりしたところがある。

出典

資料⑤『日本外交文書』第5巻（外務省調査部、1929年）383頁

資料⑥～⑧は松田道之編『琉球処分』下巻より

（『琉球所屬問題關係資料 第7巻』本邦書籍株式会社、1980年）

資料⑨「松田内務大書記官ヨリ勅書並ニ尚泰外二名ヘ達書返上」

<JACAR(アジア歴史資料センター) : Ref.A03022999600>

【資料⑫】松田道之に与えられた任務と権限（一八七九年、『琉球処分』下巻百四十五—百五十頁）

今般琉球藩ニ出張被仰付候ニ付テハ左ノ旨趣ニ拠テ処分可致此旨相達候事
内務大書記官松田道之
明治十二年三月十一日 太政大臣三条実美

- ①藩王及ヒ王子等ニ別紙勅諭書ヲ示シ達書ヲ渡スヘキ事
- ②旧藩王ハ速ニ居城ヲ退去セシメ東京ニ出發スル迄ハ其別第等便宜ノ場所ニ仮住セシムヘキ事
但シ居城ハ追而テ正式ニ依テ陸軍ニ請渡シヲナス迄ハ仮リニ當所長ニ請取ラシムヘシ
- ③旧藩王ヨリ県令ニ対シ土地人民及ヒ官簿其他諸般引渡ノ手續ヲ為サシムヘキ事
- ④旧藩王ニ命シ土地家屋倉庫金穀船舶其他諸物件ノ官ニ属スヘキモノト旧藩王ノ私有ニ属スヘキモノトヲ引分ケ具申セシメテ之ヲ監督シ且租税土木秩祿其他諸般ノ前途処分ヲ要スルヘキ事項ヲモ取調ヘ県令ト協議ノ上内務卿ニ具狀スヘキ事
但内務卿ノ指令ヲ待タス県令ヘ請取ラシメテ差支ヘナキモノハ其手續ヲナサシムヘキ事
- ⑤旧藩ノ苛政ハ詳細取調ヘ内務卿ニ具狀スヘシ然レトモ即時改正スレハ人心ノ帰向ヲ得テ随テ処分上ノ便宜トナリ而シテ其事タル前途之処分ニ差響カサルモノハ県令ト協議ノ上速ニ施行シ追而内務卿ニ報告スヘキ事
- ⑥処分上ニ就テハ旧藩王ニ対シ指揮スルヲ得ヘキ事
- ⑦県治上ニ就テハ県令ノ事務ニ參スヘク若シ県治ノ処分上ニ關係スル事項ハ県令ニ対シ指揮スルヲ得ルヲヘキ事
- ⑧旧藩王又ハ旧藩吏等ニ於テ今般ノ処分ヲ拒ミ居城ヲ退去セス土地人民官簿其他諸般ノ引渡ヲ為ササルニ於テハ本人ハ警察部ニ付シ拘引スルモ苦シカラス若シ反状ヲ顯ハシ兇暴ノ所為ニ及フトキハ當所ニ謀リ兵力ヲ以テ処分スヘキ事
- ⑨土人狼狽騷擾スルトキハ懇篤説諭其他適宜ノ方法ヲ以テ勉メテ鎮撫ヲ謀ルベシ若シ反状ヲ顯ハシ兇暴ノ所為ニ及フトキハ警察部ニ付シテ之ヲ捕縛スルトモ又ハ當所ニ謀リ兵力ヲ用ユルトモ其場合ニヨリ相当ノ処分ヲ為スベキ事

- ⑩旧藩王及ヒ王子等東京住居ノ事ニ付歎願固辞スル等ノ事アルトモ決シテ許容ス可ラス若シ詐偽ヲ以テ規避セントスル等ノ所為アリテ不得止時ハ拘引シテ東京ニ送ルベシ然レトモ病氣等ノ事故ニテ事実出發ナシカタキヲ視認ムルトキハ一応政府ニ具狀シ指令ヲ受クヘキ事
- ⑪入琉ノ時ニ際シ藩王ヨリ遵奉書ヲ呈スルトモ決シテ受納ス可カラス命令ノ通行行フヘキ事
- ⑫此命令ノ外臨機処分ヲ要セサルヲ得サル事アレハ場合ニ応シ相当ノ処分ヲナスヘキ事
- ⑬以上件々ノ事務ヲ畢レハ余ハ県令ノ本務ニ譲リ速ニ帰京復命スヘキ事
（*便宜上、項目には通し番号を振った）

【資料⑬】（一八七九年、『琉球処分』下巻二百七—二百十一頁）
廢藩置縣ニ付テ諸般引渡シ之儀ハ左之簡条ニ從ヒ取計可有之候也

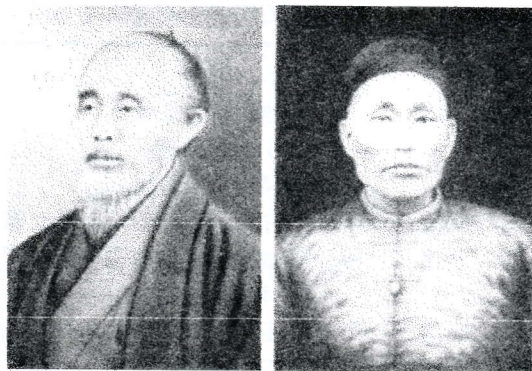
於那霸 処分官

内務大書記官松田道之

明治十二年四月三日

旧琉球藩王尚泰殿

- 一 租税之事
 - 一 旧藩王以下士族等ノ家祿之事
 - 一 官有金穀之事
 - 一 官邸舍官倉庫之事
 - 一 官地官山官林之事
 - 一 河港道路橋梁修築之事
 - 一 官有船舶之事
 - 一 学校社寺之事
 - 一 官職身分之事
 - 一 制法禁令之事
 - 一 戸口之事
 - 一 勸農商之事
 - 一 右者沖繩県令ニ可引渡事
 - 一 警察上取組中入獄之者又ハ入獄セスシテ取組中ノ者之事
 - 一 右ハ内務省出張所長ニ可引渡事
 - 一 犯罪ニ拠テ入獄又ハ遠島ノ者之事
 - 一 民事訴訟審問中ノ者ノ事
 - 一 右ハ内務省出張所裁判所事務長ニ可引渡事
- （*注 各項目の詳細略）



与那原良傑(馬兼才)

死没年不詳。琉球最後の三司官の1人。日本語が堪能だったため、初代の東京駐在親方を務める。琉球併合を進める明治政府に対し、東京滞在中の1877年12月、尚泰王の命をうけ密かに神戸へ赴き、日本赴任のため神戸港に立ち寄っていた清国の初代駐日公使・何如璋のもとを訪ね、尚泰の書簡を届け救援を求めた。
琉球国滅亡には三司官として立ち会い、連行される尚泰に従って東京へ赴いた。

■幸地の手紙は、松田道之が「琉球処分」のさなかの1879年4月頃に入手し、伊藤博文に報告した。この手紙は、松田編「琉球処分」(上・中・下)には掲載されていない。「琉球処分」時、日本側スパイとして松田に協力した琉球人に大湾朝功(後に県庁職員)、許田普益(伊波普猷のおじさん)らがいた。手紙は彼らを通じて入手したと考えられる。

●「松田内務大書記官ヨリ沖縄県地事情及今後処分方上申」
(「JACAR(アジア歴史資料センター)」
Ref.A03022999300、公文別録・琉球廃藩置県処分・明治八年・第二巻・明治十一年十二月～明治十二年六月(国立公文書館)」)

四月二十六日(1879年)

幸地親方より贈りたる書翰

乾第三号の達書承諾仕候今般日本政府の命ずる処、百憂熟考して容易軽忽に事を成すべからざるは勿論なれども、御翰中第一号明治正朔を遵奉の件、第二号大清国朝貢断絶の件、第五号日本法律を履行する三件を最も重要とす。右三件領承致さずこそ肝要也。日本官吏空勢を張り凶兵銃器を振て改革を迫ると雖と恐るべからず屈すべからず。若しこれを恐れ、これを屈し承諾する時は後日の大害のみならず、大清国に対し相済ぬ儀に付、たとえその命を絶ち、その体を切斷粉骨するも領承せざるを重良也とす。日本政府嚴迫そして、廢藩これ果斷を為すあらば、溫柔を旨としその命を奉ずるも妨なし。しかれども一朝の怒りにその国を忘れ、その身を忘れ抗するの志操を出すべからず。万一これを犯すあらば後日悔ゆるも及ぶべからず。乾二号の旨意に基くべし。かつ大國諸臣に於ても世論の在るあり。坤第一号に依るべし。彼を前にして是を後にするを至当也とす。必ず数月を待て後ら処分在るべし。事を疑ひ迷蒙するなかれ。再拝

池上幸次(幸地親方の変名)

諸見里之子親雲上殿

与那原親方に宛つる筈なるを嫌らいを避けてこの者に宛る也

(＊句読点を付し、ひらがなとするなど読みやすくした)

四月二十六日
幸地親方ヨリ贈りたる書翰

乾第三号之達書承諾仕候今般日本政府ノ命
スル要百憂熟考シテ容易輕忽ニ事ヲ成ス可

カラサレハ勿論ナレ共御翰中第一号明治正
朔ヲ遵奉ノ件第二号大清国朝貢断絶ノ件事
立号日本法律ヲ履行スルノ三件ヲ最も重要
也トス右三件領承不致コソ肝要也日本官吏
空勢ヲ張り凶兵銃器ヲ振テ改革ヲ逼ルト虽
此恐ル可カラス屈ス可カラス若シ之ヲ恐レ
星ヲ屈シ承諾スル時ハ後日之大害而已ナラ
ス大清国ニ對シ不相済儀ニ付後令其命ヲ絶
テ其體ヲ切斷粉骨スルモ領承セサルヲ重良
也トス日本政府嚴迫而廢藩之果斷ヲ為スア
ラハ溫柔ヲ旨トシ其命令ヲ奉スルモ妨ナシ
然レハ一朝之怒リニ其國ヲ忘れ其身を忘レ
礼スルノ志操ヲ出ス可カラス萬一之ヲ犯ス

アラハ後日悔エルモ不可及乾二号ノ旨意ニ
基ク可シ且大國諸臣ニ於テモ輿論之在ルヲ
神第一号ニ依ル可シ彼ヲ前にシ星ヲ後ニ
スルヲ至當也トス必ス数月ヲ待テ後ら處分
在ル可シ事ヲ疑ヒ迷蒙スル勿レ再拜

諸見里之子親雲上殿

与那原親方に宛つる筈なるを嫌らいを避けてこの者に宛る也

【「琉球処分」と琉球救国運動関連略年表】

1840年	アヘン戦争
1843年	幸地朝常生まれる
1853年	ペリーが来琉
1854年	琉米和親条約締結
1871 (明治4) 年	宮古島の貢納船が台湾に漂着し、54人が殺害される (生存者12人帰国)
1872 (明治5) 年	明治政府が琉球国使節を召還し、 <u>琉球国王尚泰を琉球藩王とする詔</u> ＝資料⑤ (日本による琉球の冊封)
1873 (明治6) 年	最後となる進貢使節 (国頭盛乗・毛精長) らが清国へ派遣される。
1874 (明治7) 年	日本が台湾へ出兵
1875 (明治8) 年	松田道之が来琉。 <u>琉清関係断絶命令</u> (清国との関係断絶命令＝5月29日)＝資料⑥
1876 (明治9) 年	<u>琉球の裁判権の移管命令</u> (5月17日)＝資料⑦ 国王の特使・幸地朝常、名城世功ら約40人が渡清 (12月10日)
1877 (明治10) 年	三司官の与那原良傑が神戸港停泊中の清国公使何如璋らが乗った「海安丸」に忍び込み、琉球救援を求める尚泰王の密書を手渡す。(12月)
1878 (明治11) 年	
1879 (明治12) 年	<u>琉球藩を廃止し沖縄県を置く</u> ＝ <u>琉球処分官・松田道之ら</u> ＝資料⑧ 理由①「琉清関係断絶命令 (明治8年5月29日) 違反 ②「裁判権移管命令 (明治9年5月17日) 違反 在清の幸地朝常から与那原良傑へ手紙 (松田が入手)＝資料⑭ 琉球の幹部ら各国の駐日公使館 (在東京) などへ密書
1879 (明治12) 年	最後の国王尚泰の上京 旧琉球王府幹部ら一斉拘引 幸地朝常が琉球救援を求め李鴻章と直接交渉 (天津)
1880 (明治13) 年	日清間で琉球分割条約まとまる 名城世功 (林世功) が琉球分割条約締結に抗議し北京で自殺
1882 (明治15) 年	旧琉球国最高幹部の一人・富川盛奎 (毛鳳来) が亡命 第1回県費日本留学生派遣 (大田朝敷、岸本賀昌、謝花昇、高嶺朝教、今歸仁朝蕃＝後に山口全述に交替)
1883 (明治16) 年	このころ運動幹部 (浦添朝忠、沢岷安本) らが亡命するなど、亡命者続出
1884 (明治17) 年	幸地朝瑞 (向承德) <幸地朝常の長男>、渡久山朝恭ら亡命 尚泰が一時帰郷 (85年1月まで) 清仏戦争 (84-85年) 幸地朝常が神山庸栄あて手紙を帰国する吉田安繁へ託す。
1885 (明治18) 年	津嘉山朝功 (向龍光) らが渡清 (4月) 幸地朝常から李鴻章へ請願＝資料
1888 (明治21) 年	国場大業 (王大業) が亡命先の清国で没
1890 (明治23) 年	富川盛奎が亡命先の清国で没
1891 (明治24) 年	幸地朝常が亡命先の清国で没
1893 (明治26) 年	亀川盛武の孫・亀川盛棟 (毛有慶) が亡命先の清国で没
1894 (明治27) 年	日清戦争始まる
1895 (明治28) 年	下関条約 (日本台湾を割譲)
1896 (明治29) 年	浦添朝忠 (向有徳) ら約30人帰国 義村朝明 (向志礼)、朝真 (向明良) ら亡命
1897 (明治30) 年	儀間正忠 (胡国善) ら兄弟5人で渡清 (徴兵忌避)
1898 (明治31) 年	沖縄で徴兵制度本格的スタート 漢学者の桑江克英 (毛克英) 徴兵忌避で渡清 この前後に徴兵忌避での渡清者続出 義村朝真や北京で陳情＝確認できる最後 義村朝明が亡命先の清国で没

1899 (明治32) 年	那覇港本格的開港に指定 (貿易額2年間で5万円の条件付) 福州の琉球館滞在琉球人68人 (*福州滞在の日本人は領事以下31人)
1900 (明治33) 年	丸一店が商号登記 (主人・尚典、支配人・幸地朝瑞 (7月4日)) 福州の琉球館滞在琉球人53人 義村朝義 (向明德) と読谷山朝英が「党派合同ノ為」に福州に渡り朝真らを訪ねる。
1901 (明治34) 年	丸一店が香港から米穀を沖縄に直接仕入 (幸地朝瑞、渡久山朝恭ら) 最後の国王尚泰死去
1902 (明治35) 年	丸一洋行 (丸一店の支店) が福州で開業 (渡久山朝恭、翁長良貞)
1906 (明治39) 年	義村朝真が亡命先の清国で没
1907 (明治40) 年	仲吉朝常が福州の丸一洋行へ赴任
1910 (明治43) 年	沖縄県立図書館が開館 (義村朝明、浦添朝忠の蔵書が寄贈される) 日本が韓国を併合
1911 (明治44) 年	清国で辛亥革命 湖城以恭 (蔡以恭) が清国で死去
1912 (明治45) 年	中華民国成立
1914 (大正3) 年	幸地朝常の妻・真鶴金が死去 幸地朝常の遺骨が福州から沖縄に移される 真壁朝正が福州で死去=新聞の死亡広告
1916 (大正5) 年	上海の東亜同文書院の饒平名智太郎が福州琉球館を訪問
1921 (大正10) 年	この前後に丸一洋行閉鎖
1933 (昭和8) 年	歴史家の東恩納寛惇が福州琉球館を訪問 (儀間正忠らが応対)
1936 (昭和11) 年	人文地理学者の米倉二郎が福州琉球館を訪問 (真栄平朝正が応対)
1937 (昭和12) 年	琉球館を使用していた儀間正忠が福州を離れる (7月30日)。台湾経由で帰国

■資料⑮ 『琉球廃藩始末』

今ここに琉球一国の議あり。曰く。五百年來恩義厚き清国へ信義を欠ば建国致しがたし。因て日本政府へあくまでも、嘆願に及ばんとす。

そも琉球国は一の独立国にして、開闢天孫子以來二十五世一系の王国にして、往古日本に通ずるものは相互の往答にして、是同権なり。中古永万年中源為朝の子舜天の国王の位に昇るも、大里按司の女縁あるを以てなり。しかるに國小にして文字なく、国用足らざるが故に日本清国に通じ、清国よりは文学を学びや一同の制度を定む。また日本に通じ、国用を足らしむるなり。何れも欠くべからざる国なるか故に、之れを父母の国と称し守礼を以て国体とす。二つのもの一も欠くべからざるものなり。

今日日本政府、清国の關係を断たざれば国権に關すと、是何事ぞや。今日新に臣となるには非ず。五百年の情義なり。人は信義有てこそ国も治る。国治らざれば建国致し難し。いかほど説諭を蒙るも此義は決して御請致し難し。いわんや此国、彈丸の小島もとより一の兵備なく、信と義と礼を以て建国す。今その信義を欠くは、万国へ対し恥辱は勿論、先王在天の神皇何とか云はん。また清国よりはいかなる譴責を来ゆも量り難し。たとへ清国異議なくとも、我より信を欠くは人道にあらず。かつ日本政府も清国の關係あるを以て藩となすも、なほ王号を廢せず国政を任するならん。もし清国の向楯なくば、藩を廢し県としその他いかなる大變革を發するも量り難し。かりに去る年前の外務卿副島氏の口達として、朝廷へ抗衡あるいは殘虐の所業ありて庶民離散する等の事あるにあざれば、藩を廢せずと、その事も虚に屬せしか。当藩に於ては日本政府へ対し失体の事あるにあらず。

今日の日本政府は昔日の日本政府にあらず。異国の風を好とす。琉球に於ては聖賢君子の教を守り、異風を好まざるを以て貴とす。日本政府の命ずるや異議なく請るに於ては、一藩の人民もまた異邦の風を倣ひ聖賢の体面をあやまり、かつ輸出に關す從來鹿児島藩の在番奉行は清使來るの際には田舎に皆居したるに非ずや。今や清国へ内密にせしものを表通兩属の国とならば、昔日よりは体裁も立つと云ふべし。寛永通宝の通貨も清使來るの時は一切融通せず別の通貨を以てす。これ日の事を清に秘せしによる。年号及び曆もまた彼を奉し來れり。この恩義の至重なるまた知るべし。かつ進貢使の清国に至るや交易売買の差多く、国用を足すに至る。この信義を断たば通商の道を失ひ藩の疲弊するまた知るべし。今万国の事を聞くに外に兩属の国もあるよし。日本のみ清を断てと嚴命するは無理無道の暴命と云ふべし。一同上下同力一致歎願せずんばあるべからず。

(カタカナをひらがなに改め、句読点を付すなど、適宜改めた)